

# 近世中期堺の鑑町芝居について

齊 藤 利 彦

はじめに

近世の芝居小屋に関する研究、特に歌舞伎の芝居小屋の研究は、当初、建築史の立場から研究がなされ、芝居小屋という、近世の大規模建築物の景観や建築構造などが解明されていった。<sup>①</sup>これら建築史の一連の研究は、いわば、「建築史的劇場史」の研究であつた。

その後、服部幸雄氏は建築史の研究成果をふまえ、「〈劇場〉のもつ精神的な意味」を明らかにするために、芝居小屋の景観とその内部構造がもつ意味、そして芝居小屋が置かれていた社会環境などを芸能史、演劇史の立場から論証された。<sup>②</sup>さらに守屋毅氏は服部氏の研究成果をうけ、「芸能という行為が社会的に展示される場が劇場」であるという観点のもと、近世の芝居小屋のもつ近世社会における社会的意義や機能を問う考察を行われた。<sup>③</sup>両者の研究によつて、近世の芝居小屋の研究は建築史的研究から大きく前進し、芸能史・演劇史のなかに位置づけられるようになった。

しかし、戦前よりの建築史からの研究も、そして服部、守屋両氏の研究においても、もっぱら江戸三座を中心として考証されており、上方の芝居小屋については、ほとんど検討がなされなかった。そのため、近世上方の芝居小

屋に関する研究は全体としてあまり多くない<sup>(4)</sup>。このことは歌舞伎研究、特に上方歌舞伎研究の問題点のひとつに数えられるであろう。

このような研究傾向のなか、土田衛氏は元禄期上方の芝居小屋の内部構造について、演出面とも関連させながら考察されている<sup>(5)</sup>。また藤田実氏は和泉国堺の芝居小屋の絵図を通して、元禄期上方の芝居小屋について検討されている<sup>(6)</sup>。また筆者も拙稿において、上方の有力「興行地」である堺の芝居小屋について論及した。その際、藤田氏が分析に用いられた「戎島芝居絵図」を使用し、堺の定芝居のひとつである戎島芝居の規模や内部構造については言及した<sup>(7)</sup>。しかしこのおり、もう一軒の定芝居である鑑町芝居については、十分な分析を行うことができず、今後の課題として残った。

この鑑町芝居は寛文期という、江戸時代の比較的早い時期に建築された芝居小屋のひとつである。そのため、上方の芝居小屋のなかでも研究対象として重要であると考えられる。ただ、全国的にみても独特の構造をもち、一般的な芝居小屋の構造・形態であったとは必ずしもいえない。しかし、上方の芝居小屋に関する研究が乏しい研究状況のなか、事例の集積と分析という観点からすると、鑑町芝居の規模や構造を検討し、その全容について確認することは、近世上方の芝居小屋研究のうえから有意義なものであると考える。

現在、鑑町芝居については、主に元禄期、享保期のふたつの時期の史資料が残っているのみで、その全容を明らかにしようとする目的からすると、史資料の伝存状況はよいとはいえない。ただ、享保期の資料のなかに鑑町芝居の内部構造を描いた絵図が伝存する。鑑町芝居の実際の景観や内部構造を具体的、かつ資料的に知ることができるのである。

そこで本稿はこの絵図を中心にしながら、元禄期の規模と比較しつつ、享保期鑑町芝居の内部構造について整理・検討をおこない、近世上方の芝居小屋の一端を明らかにしていきたい。

## 一 鑑町芝居の公許とその位置

堺では寛文延宝期に相次いで定芝居が公許された。すなわち、寛文一〇年（一六七〇）八月一日、南郷の外縁にある鑑町に鑑町芝居が、ついで七年後の延宝五年（一六七九）には戎嶋清水町に戎嶋芝居が公許され、翌六年（一七八〇）より興行を開始している。ただし、戎嶋芝居は公許される以前、寛文八年より非公許のかたちで興行を開始していた。堺では、これら二軒の定芝居において、ほぼ近世を通して興行が行われている。<sup>(8)</sup>

この二軒の定芝居のうち、鑑町芝居の立地場所である鑑町は、堺四辻制では堺南端郷付町分に属し、南北二組制では南組浜筋分に属した町である。この町は江川町の西、大道の西七筋目の通りを挟む両側と小農人町と江川町の南、そして南半町側の飛地からなる、文字どおり鉤状に曲がった町であった。町名の由来は、この町が鉤状に曲がっていることからきていると考えられる。

鑑町は、鑑町南半町の西にある舞台町を分断するかたちで飛地が存在しており、この飛地に鑑町芝居は立地していた。『今昔操年代記』に「堺南の端芝居」<sup>(9)</sup>、享保十九年（一七三四）三月板役者評判記『役者初子売』京巻では「堺南端舞台町芝居」<sup>(10)</sup>という名称の芝居小屋を確認することができるが、これらの芝居小屋は、それぞれ鑑町芝居のことをさしていると考えられる。というのも、鑑町芝居が舞台町を分断するかたちで存在する鑑町の飛地に立地していたため、一見、舞台町に立地する芝居小屋と思われ、そのため「舞台町芝居」とも称せられたものと考えられる。ただし現在、唯一鑑町芝居の番付で伝存している番付には「鑑町芝居」<sup>(11)</sup>とあり、名称として「鑑町芝居」「舞台町芝居」の両方でよばれていたようである。

寛文延宝期に、堺において相次いで定芝居が公許された理由については、すでに拙稿で指摘しているが、二軒の定芝居公許とその理由は、定芝居を公許し公的な保証を与えるかわりに、興行の「場」を特定・限定し、興行の掌

握・管理を容易ならしめようとし、さらに公的な保証を与えることにより、安定した興行を継続させ、その経済的波及効果を経済的地盤沈下が進行しつつあった堺経済へのカンフル剂的役割としようとする意図のもと公許されたものと考えられる。<sup>12)</sup>

では、なぜ二軒の定芝居を公許するにあたり、鑑町、戎嶋清水町にそれぞれ公許されたのであろうか。先述したように、鑑町は堺市中の最南端に位置する。一方、戎嶋芝居が立地した戎嶋は、寛文四年（一六六四）、大小路浜の北浜に接して洲が形成された土地で、同八年（一六六八）に堺町に含まれ、北郷浜分に属した。元禄八年の段階で戎嶋芝居のあった清水町をはじめとして十二町が編成されたが（元文三年（一七三八）には一町増えて十三町）、これらの町々は会所と年寄を有する正式な町としては認められず、公式には「戎嶋」として一町を構成していた。この新開地戎嶋は、市中とはふたつの橋で繋がっており、一種、出島状となっている。

このように鑑町芝居と戎嶋芝居の立地場所を確認すると、堺奉行所が定芝居を市中に公許するにあたって、市中南郷北郷（南北二組制では南組、北組）それぞれに一軒づつ定芝居を配置しようとしたこと、その際、芝居小屋を堺市中の中心より遠く引き離そうとする意図をもっていたことは明白である。特に鑑町芝居の近隣には、井原西鶴の作品にもしばしば登場する乳守（津守）廓が存在したことは注目しなければならないであろう。

堺には市中南北に二ヶ所の廓が存在したことは周知のとおりである。すなわち、南郷南高須町の乳守廓（津守廓）、北郷北高須町の高須廓である。『色道大鏡』に収める延宝三年（一六七五）の廓図より、延宝三年段階で、乳守廓には女郎屋三五軒・揚屋一〇軒が存在したことがわかる。一軒目の定芝居である鑑町芝居公許のおり、堺奉行所は南郷の乳守廓周辺に定芝居を公許し、いわゆる「悪所場」をその界限に集中させようとしたものと考えられる。一方、二軒目の定芝居である戎嶋芝居については、北郷の高洲廓近辺ではなく、戎嶋清水町に公許されている。

先に述べたが、戎嶋は寛文四年に形成された洲であり、同八年に堺町に含まれ、本格的に町割がなされた新開地で

ある。戎嶋芝居の興行は、鑑町芝居公許に先立つ二年前、すなわち、寛文八年より非公許のかたちですでに開始されていた。<sup>(13)</sup>この興行開始は、おそらく新開地繁栄策の一環としての臨時興行であり、のちの延宝五年に正式に公許されたものと考えられる。そのため、高洲廓近辺ではなく、戎嶋清水町にそのまま公許されたのではないかと考えられる。加えて、戎嶋そのものが市中と引き離された立地条件であったことも理由であったものと考えられる。また、両芝居の芝居主などの関係者の多くが後述するが「土佐屋」の屋号をもつ人々である。おそらく同族と考えられるが、定芝居公許にあたり、土佐屋関係の人々が所有する土地で許可条件にあう場所が許可されたか、あるいは外縁に土地を所有する有力町人が選ばれたのか、なども理由として考えられよう。

さて公許後、戎嶋芝居は立地場所を度々移転するが、鑑町芝居は一度も立地場所を移転しなかった。しかし、安永九年（一七八〇）一〇月、鑑町芝居は大破・休櫓願いを堺奉行所に提出する。<sup>(14)</sup>その理由については判然とはしない。このおり、「芝居主之内」住吉屋六兵衛が「櫓借請」け、大寺境内で「子供芝居」を興行したいと願ひ出た。堺奉行佐野備後守政親は、これを大坂城代牧野越中守貞長に「相伺」つたうえ、翌十一月二一日にその願いを許可した。これにより長年人々に親しまれた鑑町芝居は、鑑町から大寺境内に移転し、以後、名称も大寺芝居と称せられ興行が行われていくのである。<sup>(15)</sup>

## 二 元禄期、鑑町芝居の規模と構造

### 1 元禄期、鑑町芝居の規模

先述したように、堺の二軒の定芝居は寛文延宝期にそれぞれ公許されたが、管見のかぎり、二軒の定芝居が公許された寛文延宝期に、両芝居の規模や構造を記した史料は伝存していない。この時期の公許時の規模や構造に関しては、詳細は不明である。ただし、元禄期の手鑑が数種伝存しており、そのなかに芝居小屋の規模や興行機構が記

されている。これらの史料から、堺が「興行地」として成立する時期の定芝居の規模とその当時の興行機構などを確認することができる。規模などに関しては、少し時代は下がるが、さほど大きな変化があったとは考えられにくい。そこで、元禄期の手鑑その他の史料から、まず元禄期の鑑町芝居の規模などについて確認していきたい。

元禄期の鑑町芝居の規模は、元禄二年（一六六八）板『堺大絵図』（以下、『大絵図』と略）や元禄期の『手鑑』を抜粋したと推考される『堺御手鑑諸法道法り』<sup>16</sup>（以下、『道法り』と略）といった史料から、その規模は表口東西一〇間半二尺六分、裏入南北三八間、舞台三間四方、橋掛長さ五間、下座一間、楽屋東西九間半・南北一〇間見物場東西八間・南北一〇間、棧敷数二三軒（各一間口宛）であつたことが確認できる。

しかし、妙国寺蔵元禄一七年（一七〇四）刊『手鑑』（以下、妙国寺本と略）をみると、裏行南北三八間（そのうち三間半預地）、楽屋東西九間半・南北四間となつてゐる。<sup>17</sup>そのほかについては間数に異同はない。鑑町芝居の規模を考えると、楽屋の幅が一〇間というのは不自然に思われ、記述の間違いなどではないかと推測される。

『大絵図』を分析された朝尾直弘氏の指摘によると、鑑町芝居の裏入南北三八間のうち、裏入南北一五間分は建物前の「道」すなわち広場であり、残り二三間が芝居小屋であると指摘されている（この点については、後述<sup>18</sup>）。裏行は広場や土居の制限をうけるにも関わらず、かなりの広さをもっていたといえる。

このような規模を誇つた鑑町芝居であつたが、この時期の鑑町芝居の表口や外囲の結構については、どのようなものであつたのかについては不明である。

つぎに興行機構について確認してみると、妙国寺本、『道法り』より、鑑町芝居の興行機構は狂言名代井上七左衛門、浄瑠璃総代山本利太夫、舞名代荒川治左衛門、「芝居并地主」が土佐屋庄兵衛、土佐屋重兵衛、子師屋次郎兵衛からなつてゐた。ただし、『堺大絵図』では土佐屋重兵衛、辻ノ治右衛門掛屋敷、ねし屋次郎兵衛掛屋敷となつてゐる。<sup>19</sup>先述したように、戎島芝居は公許後移転を繰り返すが、その理由は地主と芝居小屋主が別々の人物であ

ったことに起因すると考えられる。一方、右で確認したように、鑑町芝居は「芝居并地主」が複数人ではあるが、同一人物であったことが頻繁に立地場所を移転しなかった理由であったものと考えられる。

## 2 「堺大絵図」と鑑町芝居

『大絵図』は元禄二年九月に作成された堺市中の全容を詳細に描いた絵図である。<sup>(20)</sup> その存在は、近世堺研究だけではなく、近世都市研究においても重要な位置を占めるものといえる。この絵図には 定芝居である鑑町芝居、戎鳴芝居も『大絵図』に描かれている。『大絵図』では、これら二軒の芝居小屋を描くにあたって、凡例に一項を設けて区別している。このことは当時、堺にとって定芝居が凡例に一項を設けるほどの存在であっ

裏入三拾八間 此分芝居道	裏入三拾八間 此録青之分芝居東西拾間半式尺六寸南北式拾三間
土佐屋重兵衛	ねし屋次郎兵衛 掛屋敷
辻ノ治右衛門 掛屋敷	

図1 「元禄二年堺大絵図」の鑑町芝居①（朝尾直弘「元禄二年堺大絵図を読む」〈『朝尾直弘全集—近世都市論—』第六巻、岩波書店、二〇〇三〉より転載）

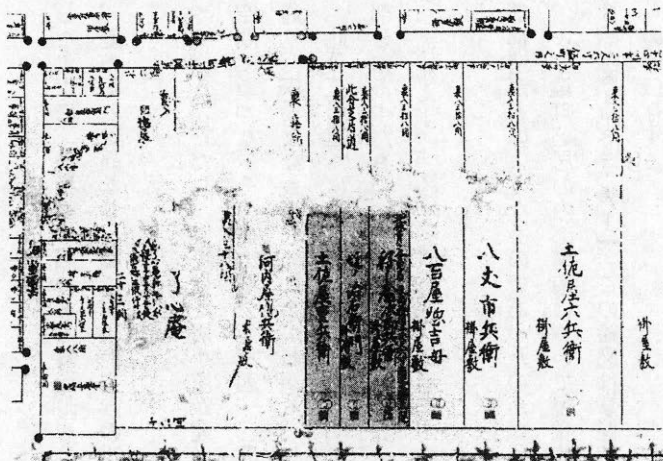


図2 「元禄二年堺大絵図」の鑑町芝居②（朝尾直弘「元禄二年堺大絵図を読む」〈『朝尾直弘全集—近世都市論—』第六巻、岩波書店、二〇〇三〉より転載）

たといえるであろう。

『大絵図』に描かれる鑑町芝居をみると【図1】【図2】、先述したように、南半町の西にある舞台町を分断するかたちで立地している。この町が短冊形の町割となっているのは、他の町とは異なり、間口が東西方向の道に面しているからである。

また鑑町芝居の規模は、東西一〇間二尺六分・南北三八間となっている。ただし、実際に芝居小屋が建っているのは「此禄青之分」である、東西一〇間二尺六分・南北二三間の空間であった。その前方部分、東西一〇間二尺六分・南北一五間の空間には建築物は建っておらず、朝尾氏の指摘通り、広場となっていたことがわかる。<sup>21</sup>しかも、辻ノ治右衛門掛屋敷部分の前方、東西三間・南北一五間の空間が「此分芝居道」になっていたことが判明する。おそらく、木戸口は「此分芝居道」を通じて芝居小屋に突き当たる部分にあったものと考えられる。

となると、櫓が木戸口の上方部分にあつては、往来からは奥まつて見えず、「此分芝居道」の往来に面する部分に櫓が組まれていた可能性が考えられる。

このような規模をもった元禄期の鑑町芝居であつたが、その内部構造がどのようなものであつたのかについては、『大絵図』からは、残念ながら確認することはできない。しかし、この鑑町芝居の内部構造について視覚的に把握できる絵図資料が存在する。それが「鑑町芝居絵図」である【図3】【図4①②・表1】。<sup>22</sup>この絵図は享保期に作成されたものと推定される絵図である。現在、この絵図を筆写したものが伝存する。

つぎにこの元禄期の規模と比較しながら、この絵図を通して、具体的に鑑町芝居の内部構造を確認していき、元禄期とはどの点が異なるのかなどを確認していきたい。



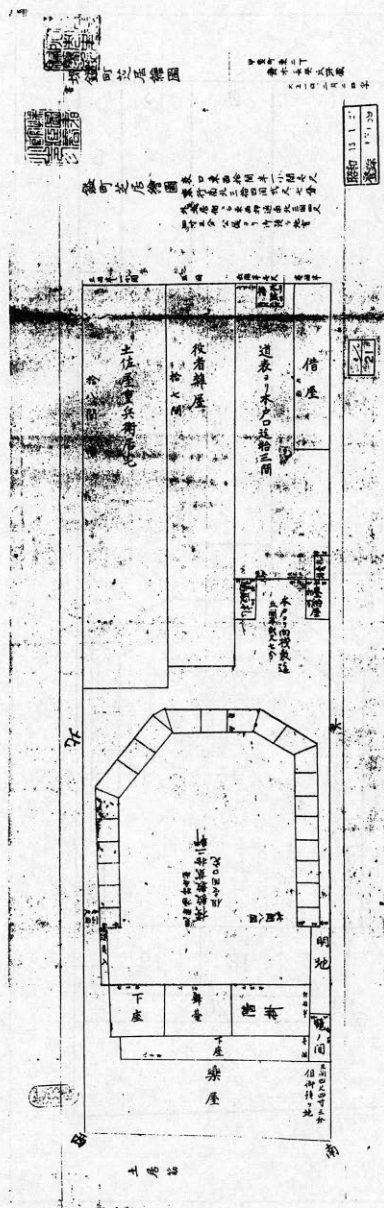


図3 「鑑町芝居絵図」①（堺市立中央図書館所蔵）

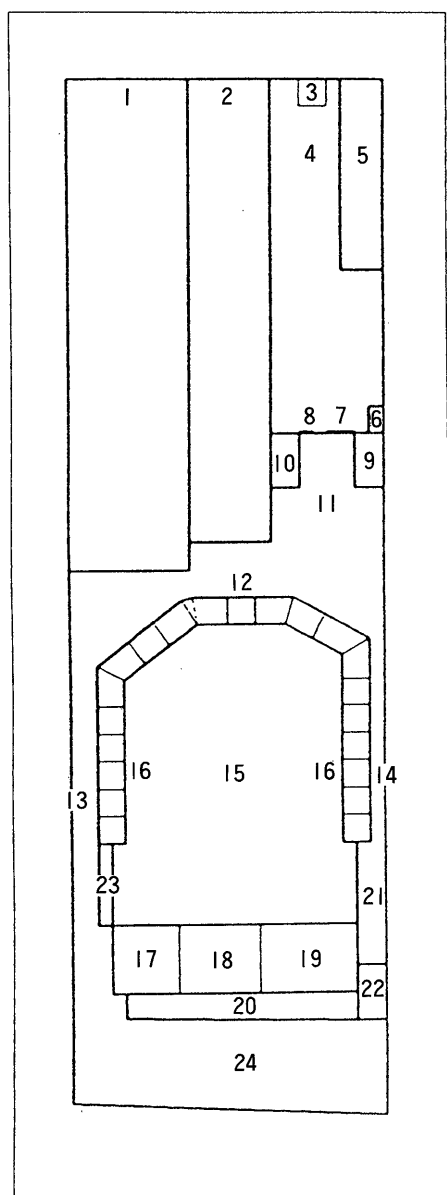


図4 「鑑町芝居絵図」②（『堺市史史料』風俗編所収絵図をもとに作成）

表1 「鑑町芝居絵図」②対応表

番号	事項	間数（東西×南北）	備考
1	土佐屋重兵衛居宅	三間半×一八間	
2	役者雑屋	三間×一七間	
3	櫓太鼓	一間五寸×一間	
4	（芝居道）	二間半一尺×一三間	
5	借屋	一間半×七間	
6	札売場	一間×（一間）	
7	大木戸	一間	
8	木戸	（半間）	
9	半畳部屋	一間×二間	
10	札取場	一間×二間	
11	木戸より向棧敷	五間半二尺七分	
12	向棧敷	三間×一間	
13	上手側通道	最大一小間一尺・最小半間	
14	下手側通道	半間	
15	見物場	八間×一一間	
16	棧敷	一間宛	計二二軒
17	下座	二間半×二間半	
18	舞台	二間半×三間	
19	橋掛	二間半×三間半	
20	下座（舞台・橋掛の背後）	一間×八間半	
21	明地	一間×四間半	
22	鏡ノ間	一間×二間	
23	道具入	半間×三間	
24	楽屋	三間四尺三分×（九間半）	

### 三 「鑑町芝居絵図」にみる享保期鑑町芝居の構造

#### 1 享保期「鑑町芝居絵図」について

先述したように、現在、堺の二軒の定芝居については、その内部構造を視覚的に把握できる資料として「鑑町芝居絵図」「戎島芝居絵図」なる絵図の筆写が堺市立中央図書館に伝存している。

この「鑑町芝居絵図」は、大正一四年（一九二五）二月段階では、旧堺市甲斐町東二丁在住の青木長栄氏が所蔵されていた。大正一四年二月二四日、堺市史編纂部は旧『堺市史』編纂のための資料として、この絵図を筆写している。その後、この書写された絵図は市史編纂終了後、他の編纂資料とともに堺市立中央図書館に移管され、昭和十五年（一九四〇）一月二六日に図書館所蔵の資料として登録されている。現在、もとの原本の行方ははっきりとしないため、筆写とはいえ、堺市立中央図書館の「鑑町芝居絵図」は貴重な資料といえる。

「鑑町芝居絵図」「戎島芝居絵図」両絵図ともに、その作成意図、作成年代などは無記載のため、判然とはしない点も少なくない。しかし、藤田氏の指摘にもあるように、「享保十七年七月改堺并泉州手鑑案」に芝居絵図が添付してある旨の記載があることから、この両芝居絵図は、こうした「手鑑案」の添付図であつたものと考えられる。<sup>23</sup>

両芝居絵図は、各部の寸法が元禄期の手鑑とは異なる点もあるが、地割の状態が元禄二年『堺大絵図』の描写とほぼ同様であり、舞台・木戸の形から判断しても、享保期から戎嶋芝居が戎嶋清水町から戎嶋伏見町に移転する宝暦四年（一七五四）十二月までに描かれたのではないかと判断される。<sup>24</sup>

ところで、旧『堺市史』編纂にあたっては、堺市史編纂部によって筆耕史料集『堺市史史料』一四五冊が編まれているが、『堺市史史料』風俗編にトレースされた「鑑町芝居絵図」が収録されている。書写した絵図をトレースしたものと考えられるが、そのトレースには内部構造の記載は省略されている。そのため、一見ではどのような内

部構造になっているかは判然とはしない。

つぎに、この絵図より享保期の鑑町芝居（以下、「絵図」と略する）の構造について確認、検討していきたい。

## 2 鑑町芝居の規模と芝居道

「絵図」をみると、当時の鑑町芝居の規模が記されている。

鑑町芝居絵図 表口東西拾間半 一小間 壱尺

裏行南北三拾四間式尺七分

外二土居側ニ而東西押通南北三間四尺

四寸三分公儀ヨリ御預ケ地有<sup>(25)</sup>

右のように、享保期の鑑町芝居の規模を表口東西の間数、裏行南北の間数などが記されている。この規模をみると、元禄期の鑑町芝居と比較して裏行南北が四間あまり小さくなっている。しかし、「公儀ヨリ御預ケ地」の南北三間四尺四寸三分を加えると、合計で三八間五寸となるので、元禄期とほとんど変わらぬ規模であったといえる。先述したように、妙国寺本『手鑑』には裏行南北三八間、そのうち三間半が預ケ地であったと記している<sup>(26)</sup>。したがって、元禄期の鑑町芝居も公儀預ケ地を含んでいたものといえる。

先に検討したが、『大絵図』をみると、鑑町芝居は舞台町を分断する鑑町の飛地にあり、短冊状の地割となっている三者所有の土地に立地していた。元禄期は芝居小屋前方の土地、東西一〇間二尺六分・南北一五間の空間には建築物は建っておらず、広場となっていた。その広場のうち、その真ん中にあたる東西三間・南北一五間の空間が「此分芝居道」であった。この道を通して木戸口にむかうかたちになっていたと考えられ、元禄期の鑑町芝居の木戸口はこの芝居道の先にあつたと推定される。

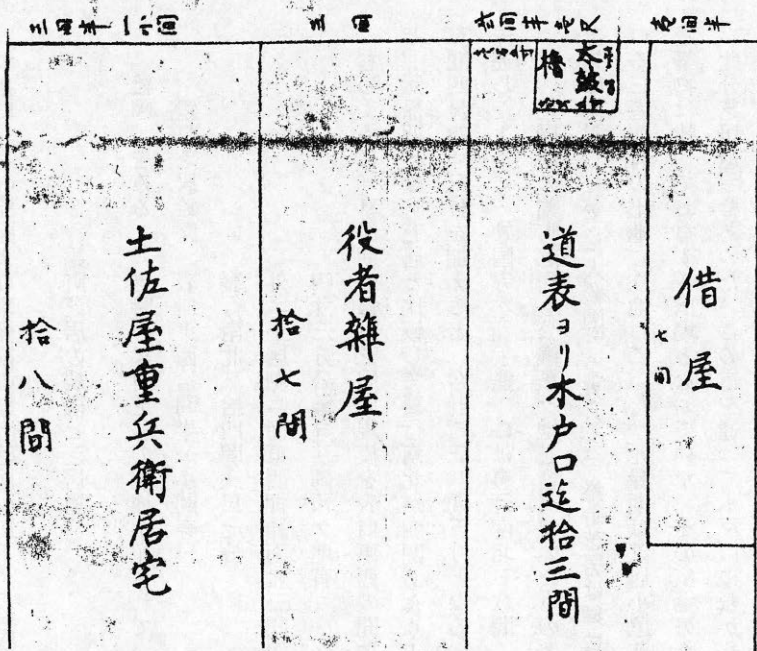


図5 芝居道周辺（「鑑町芝居絵図」堺市立中央図書館所蔵）

ところが「絵図」をみると【図5】、享保期の鑑町芝居前の広場はかなり変化があったことがわかり、同時に木戸口が移動していることも把握できる。

まず「絵図」をみてもわかるように、芝居道が中央から芝居小屋にむかつて、もつとも左の地割に移動している。また元禄期には芝居道は一五間あったが、享保期は一三間となっており、二間短くなっている。このことは木戸口が元禄期よりも二間せり出すかたちに変わったことを物語るものである。

また、この芝居道には東西一間半・南北七間の借家が立地していた。そのため、芝居道の東西横幅は最大幅で四間半一尺、最小幅で三間一尺であった。そして「絵図」より、この芝居道と往来に接するところに一間五寸・一間の櫓があったことが判明する。

先に元禄期の鑑町芝居の櫓は判然とはしないが、芝居小屋前の広場の存在から往来に面する

ところに櫓が組まれていたのではないかと推定した。「絵図」をみると、享保期の鑑町芝居の櫓は、芝居道が往来に面するところに組まれていたことが判明する。そのため、元禄期も同様のかたちとられていた可能性が高い。

さて、この芝居道の西隣りには「役者雑屋」なる家屋が建っていた。元禄期には見られなかった家屋である。東西三間・南北一七間という規模のこの家屋は、名称からして芝居小屋関係、しかも役者関係の家屋であることは間違いないであろう。しかし、その用途については「雑屋」と記されているだけで不明である。

この「役者雑屋」は木戸口から芝居小屋内部に四間も食い込んでゐる。このような家屋の芝居小屋内部への食い込みは「役者雑屋」だけではなく、その隣の「土佐屋重兵衛居宅」も同じである。「土佐屋重兵衛居宅」は東西三間半・小間一八間もあり、実に家屋後方の五間が鍵町芝居に食い込んでゐるのである。では、なぜこのような家屋の食い込みが、わざわざなされるようになったのであろうか。

「土佐屋重兵衛居宅」の持ち主、土佐屋重兵衛については、元禄期の鑑町芝居の興行機構を整理したおりにも触れたが、鑑町芝居の地主であり芝居小屋主の名前である。<sup>(27)</sup>当時の土佐屋重兵衛が元禄期の手鑑などに出てくるその人か、あるいは代替わりしているかは不明であるが、いずれにしても、この土佐屋重兵衛は鑑町芝居の地主であり、芝居小屋主であるものと考えられる。その居宅が芝居小屋内部に大きく食い込んでゐるのである。このことは、彼の居宅が本家茶屋であつた可能性を示すものといえよう。本家茶屋とは本家ともいい、芝居小屋に接続するか、あるいは近傍にある芝居小家主の持家のことで、その多くが茶屋を経営していた。<sup>(28)</sup>

享保期、鑑町芝居と同様に堺の定芝居であつた戎嶋芝居には、芝居小屋主である土佐屋かんが営む本家茶屋が接続していた。<sup>(29)</sup>鑑町芝居の場合、その立地環境や構造から、芝居小屋に隣接するかたちで芝居茶屋やそれに相当する家屋を建築することは難しいといえる。そのため、芝居茶屋を建築する場合は、前方広場の土地に家屋を建て、その家屋を芝居小屋と接続するという方法しかなかったものといえる。したがって、鑑町芝居内部に食い込んでゐる

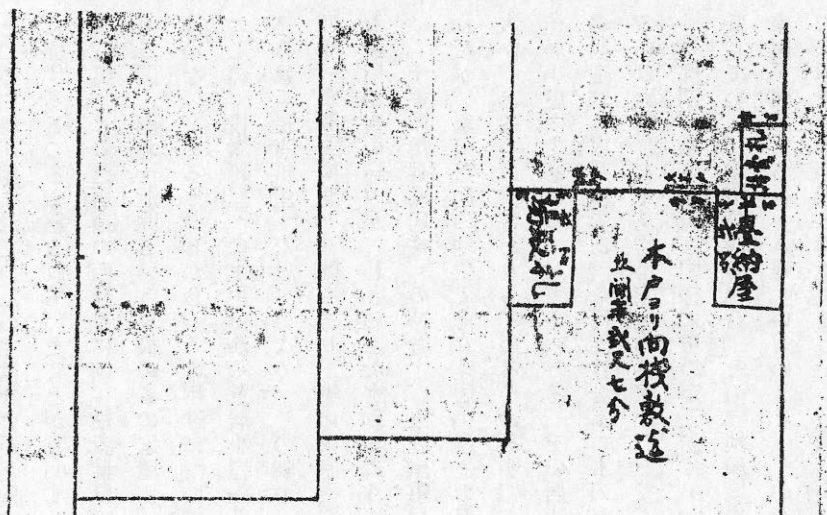


図6 木戸口まわり（「鑑町芝居絵図」堺市立中央図書館所蔵）

部分は、出入りできるようになっていたものと考えられる。ただ、「役者雑屋」が芝居小屋内部から出入りできるようになっていたかは判然とはしない。

## 2 木戸口まわり

さて一三間、すなわち約二四メートルの芝居道を通り木戸口にさしかかると、まず左に、幅半間・長さははっきりしないが一間ほどの「札売場」があった。前売り券などを持たずに見物に訪れた人々は、ここで木戸札を購入して芝居小屋に入場したであろう【図6】。

棧敷の見物以外は、この木戸口より芝居小屋に入るわけであるが、鑑町芝居正面には「大木戸」「木戸」とがあった。大木戸は一間、木戸ははっきりしないが半間ほどの幅であった。当然、大木戸は入場用、木戸は追出し用であったといえよう。上方においては延宝頃以降、絵画資料では木戸はひとつしか描かれなことが多い。その意味において、鑑町芝居は貴重な事例であろう。

大木戸をはいると、左手に幅一間・長さ二間の「半畳部屋」があった。人溜での見物のためには、この半畳部屋に



おいて半畳、蓆盆を借りる必要があつた。大坂表ではおおそ五文ほどであつたため、鑑町芝居での見物においても、同等の値段で半畳と蓆盆を借りたものと推察できる。「戎嶋芝居絵図」には茶見世が描かれているのだが、鑑町芝居には描かれていない。しかし茶見世、あるいはそれに類似する施設は備えていたものといえる。

木戸の隣には半畳部屋と同規模の「札取場」があり、興行が終わり帰宅する人々は札取場に木戸札を返し、そして木戸をくぐり帰宅の途についたのである。

### 3 人溜・棧敷

#### ①人溜

元禄期の手鑑に記されているように、鑑町芝居、戎嶋芝居ともに観客席を「見物場」と称している。この「見物場」はいうまでもなく、上方では人溜といわれる観客席である。

先述したように、元禄期の『手鑑』などから、鑑町芝居の「見物場」、すなわち人溜は東西八間・南北一〇間であつた。「絵図」をみると【図7】、享保期の鑑町芝居の人溜は、東西八間・南北一一間であり、東西の間数に変化はないが、南北に一間拡大していることがわかる。後述するが、舞台や橋掛が幅の規模を縮小しているため、人溜を一間拡大することが可能になったものと考えられる。また、南北に通道が存在するが、南側は半間、北側は最大幅で一小間一尺であつた。

ところで、寛延三年（一七五〇）、同四年（一七五二）の両年、相撲取玉井友五郎らが鑑町芝居で相撲地取を行なつてゐる。<sup>(1)</sup> 相撲地取とは力士が各自の所属する相撲部屋で行なう稽古のことである。芝居小屋で相撲の稽古をするとなると、具体的にどこで稽古したのであろうか。稽古する場所を考慮すれば、人溜であつたであろう。<sup>(2)</sup> ということは、鑑町芝居の人溜は、寛延期になつても仕切枱の枱席にはなつていなかったと考えられる。

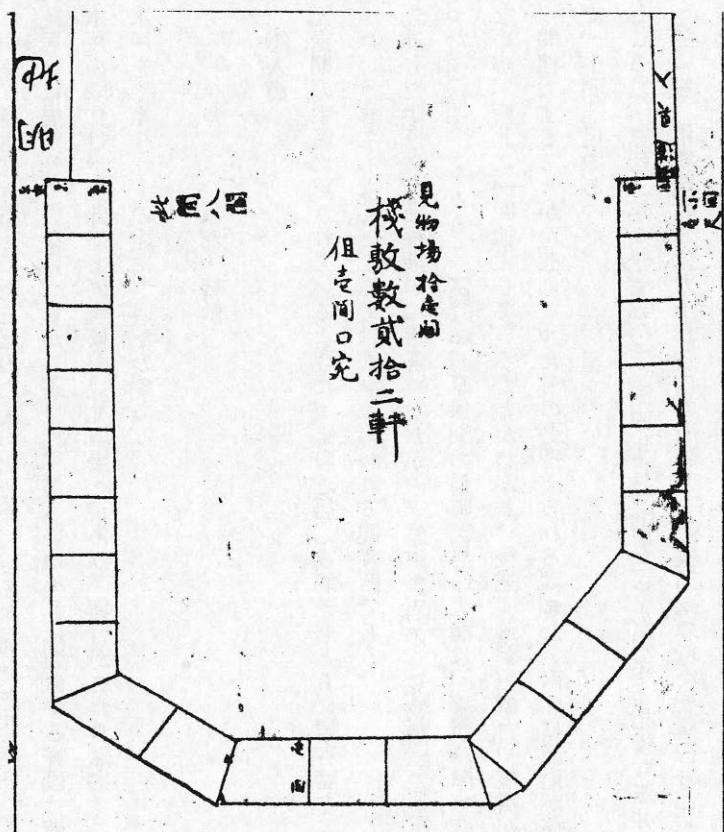


図7 人溜・棧敷周辺（「鑑町芝居絵図」堺市立中央図書館所蔵）

## ② 棧敷

つぎに棧敷についてみてみよう【図7】。元禄期の鑑町芝居の棧敷は一間宛の二三軒であったが、「絵図」に「棧敷数二拾二軒」と記されており、また視覚

的にも、享保期には棧敷は一間宛二二軒となっていた。つまり、元禄期よりも一軒少なくなっているのである。

「絵図」をみると、下手側の向棧敷に屈曲する棧敷が二軒、反対側の上手側の向棧敷に屈曲する棧敷は三軒となっている。バランスを欠いた構造になっているといえる。「絵図」と同時に描かれたと考えられる

「戎嶋芝居絵図」をみると、上手下手両側の屈曲する箇所は、三軒づつであった。このようなことを勘案すると、一軒少なくなった棧敷は、下手側の向棧敷に屈曲する棧敷一軒であったと考えられる。一軒少なくなった理由は定かでない。おそらく、本家茶屋と考えられる、土佐屋重兵衛居宅を五間も内部に食い込ました影響からではないであろうか。

右で指摘するように、鑑町芝居の上手・下手にある棧敷は向棧敷の方に屈曲し、回り込む形をとっている。全体的にU字形をとっていることが視覚的にはつきりと確認することができる。おそらく、元禄期の鑑町芝居の棧敷も同様に全体的にU字形をとっていたものと考えられる。この棧敷の背後に下手側は半間、上手側は最大で一小間一尺、最小ではつきりしないが半間程度の空間がある。この空間は棧敷うしろの通道であったと推定される。

また、上手下手両側の棧敷ともに、その先頭が三間ほど舞台から離れている。上手側には「道具入」が存在し、下手側には幅一間・長さ四間半の「明地」となっている。この明地は通道とつながっており、人溜に入れるようになっていた。しかも一間半の長さが橋掛に面しているのである。ここも観客席であったのであろうか。

さらに棧敷で注目できるのは、上手側棧敷が向棧敷に屈曲する部分で三角形の箇所が生じていることである。棧敷を一軒減らしたために生じた空間であるといえる。しかし、このような部分は果たして、どのような構造・用途になっていたのであろうか。いまのところ判然とはしないが、今後の検討課題としたい。<sup>33</sup>

さて、これまで鑑町芝居には二階席が存在したのか否か、この点については明確ではなかった。しかし「絵図」をみると、「木戸より向棧敷迄五間半二尺七分」と記されていることや「絵図」に描かれているように、視覚的にも鑑町芝居に向棧敷が存在したことが判明した。したがって、鑑町芝居は二階建てであり、おそらく、南北棧敷も二階席が設けられていたものと考えられる。この鑑町芝居の向棧敷は「木戸より向棧敷迄五間半二尺七分」とあることからわかるように、外囲いの内側にあったと考えられる。とすると、鑑町芝居の表方の軒高は、大坂の芝居

小屋同様に低かったものと推定される。また向棧敷の存在がはつきりしたことにより、拙稿で推定したように、鑑町芝居の観客定員数は二階席合わせて一一〇〇人強であったものと考えられる。<sup>34)</sup>

#### 4 舞台まわり

##### ①舞台・橋掛・下座

鑑町芝居の舞台まわりは舞台・橋掛・下座の三つから成り立っていた【図8】。先述したように、元禄期の鑑町芝居の舞台まわりは、舞台三間四方・橋掛五間長・下座一間であり、計九間で構成されていた。同時期の戎嶋芝居や大坂の芝居小屋が一二、一三間であることを考えると、若干小さめである。ただ、鑑町芝居の表口が一一間半であったことを考えると、妥当な広さであったといえる。

享保期の鑑町芝居の舞台まわりを「絵図」より確認してみよう。まず舞台は二間半・三間、橋掛二間半四方、下座も二間半四方であった。舞台の幅の寸法は三間から二間半となっており、半間縮まっている。橋掛は元禄期、五間長であった。その幅は判然とはしないが、二間程度であったと推定される。この橋掛も享保期には二間半・三間半と長さが縮まっている。このような舞台や橋掛の縮小は、演出にも影響があったのではないであろうか。

さて、つぎに下座についてみると、享保期の鑑町芝居では二間半四方になっており、かなりの広さに拡大している。しかし舞台・橋掛・下座の間数を合計すると九間であり、元禄期と舞台まわりの広さと変わりはない。そのため、橋掛の広さを一間半縮小させたのは、その分の長さをもつて、下座を拡大するためであったものと考えられる。戎嶋芝居の下座は三間四方という、かなり広い寸法であった。藤田氏によると絵画資料などから、貞享期以降の上方の芝居小屋の下座は戎嶋芝居とそのかたちは共通するものであったという。<sup>35)</sup>このことからすると、元禄期の鑑町芝居の下座は能舞台と類似した一間であり、上方の芝居小屋の下座としては小さめであった。そのため、橋

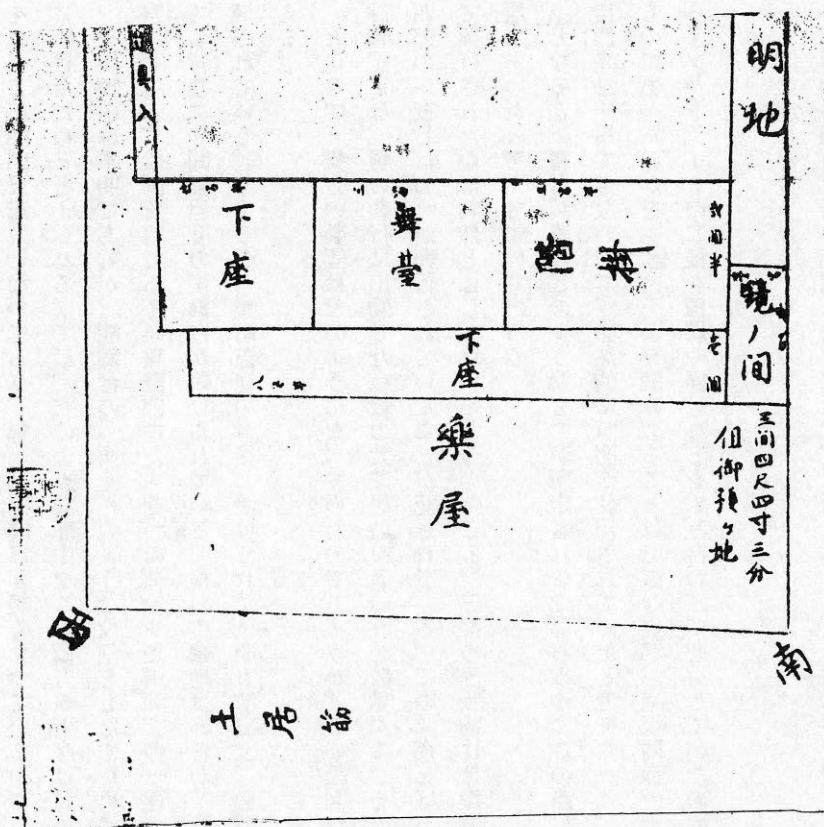


図8 舞台まわり・楽屋まわり（「鑑町芝居絵図」堺市立中央図書館所蔵）

掛の長さを短くし、下座を大きくしたのであろう。

また、この下座で注目できるのは舞台、橋掛の背後にも別に南北一間・東西八間半の下座が設けられていることである。この下座はおそらく、舞台・橋掛・前方の下座とは平行して設けられていたと考えられる。また上手・下手側の幅の寸法が同一ではないようであり、上手側は少し短かったと考えられる。

この舞台・橋掛の背後に設けられた下座は元禄期の鑑町芝居にはなかったものと考えられる。というのは、この下座の後ろに楽屋が存在するが、元禄期の楽屋の寸法は東西九間半・南北四間であった。ところが「絵図」

をみると三間四尺三分となっており、幅が約一間ほど短くなっているからである。このことは先ほどの下座を新たに設けたためと考えられる。では、どのような理由でこの後方の下座は設けられたのであろうか。

その理由は不明であるが、能舞台の「後座」のような役割をもたすために設けられたのであろうか。藤田氏の考察によると、絵画資料である「難野郎古たゝき」の挿絵や菱川師宣の一連の劇場図などには、橋掛から下座にかけての背後に一間幅程度の後舞台が設けられている<sup>36</sup>。検討の余地はあるが、場合にに応じて使用したのではないかと指摘されている。とすると、鑑町芝居の背後に設けられた下座も演出上、必要に応じて使用された可能性が高いといえる。

ところで、舞台の装置はどのようなようになっていたのであろうか。この絵図が描かれたと考えられる享保末年の役者評判記には、堺の興行に出動した京坂の大芝居の役者の評が散見する。その記事のなかに堺の芝居小屋で、山下京四郎の「夜しばる」<sup>37</sup>が興行されていたことが記されている。この「夜しばる」興行が鑑町芝居、戎嶋芝居のどちらで興行されたかは判然とはしない。ただ今のところ、三都の出版物には鍵町芝居しか登場しないことから、鑑町芝居であったと考えてよいであろう。

となると、舞台装置はどのようなものが想定されるであろうか。この点については拙稿で指摘したが、夜芝居は自然光を使用できないので、必然的に照明が使用されていたと考えられる。堺の芝居小屋の舞台装置がどのようなものであったのかを「絵図」より読み取ることができないが、京坂同様、上から照らすボーダーライト、下から照らすフットライトの二種を蠟燭や提灯などを組み合わせて使用していたのではないであろうか。<sup>38</sup>

## ② 楽屋まわり

元禄期の鑑町芝居の楽屋については、「道法り」のように幅東西九間半・長さ南北一〇間と記す史料と、妙国寺

本手鑑（元禄一七年刊）のように、幅東西九間半・長さ南北四間とする史料とがある。<sup>39</sup> 両者には幅東西の間数でかなりの差があるが、舞台や橋掛など、その他の施設に関しては同様の寸法である。鑑町芝居の規模からすると、楽屋の幅は四間が妥当と考えられる。

元禄期、幅東西九間半・長さ南北四間の長さであったと考えられる楽屋は、かなりの広さを有していたといえる。それが先に検討したように、享保期には舞台・橋掛背後に下座を新たに設けるために幅をおよそ一間ほど縮め、約三間四尺三分となつてゐる。長さについては、「絵図」をみてもわかるように上手側の通道と推定される空間との境界がはつきりとは描かれてゐない。そのため、どこまでが楽屋であつたのか判然とはしない。ただ表口との関係からそう変化があつたとも考えられず、おそらく元禄期の九間半、あるいはそれよりも多少短くなる程度の長さであつたのではないであろうか。また、楽屋は元禄期以来、公儀預け地部分に位置したことが判明する。

さて「絵図」をみると、下手側をみると幅一間・長さ二間の「鏡ノ間」があり、役者たちはこの部屋から橋掛に出たと考えられる。能舞台と類似した要素が残つてゐるといえよう。

上手側の下座横には幅半間・長さ三間の「道具入」が存在した。どのような「道具入」れであつたかは詳らかにできないが、いわゆる幕内に所属する施設であつたと考えられる。

では、このような改築がいつの段階でなされたのであろうか。その時期については、いまのところ史料的に不明である。ただ、先述したように「鑑町芝居絵図」「戎嶋芝居絵図」は、享保期から宝暦四年（一七五四）十二月までに描かれたものと推定される。そのため鑑町芝居の改築は、この期間になされたものと推考できる。

それでは、どのような理由から改築がなされたのであろうか。この点については、改築による芝居上演の充実や観客動員の増加などが理由として念頭に浮かぶがはつきりとはしない。今後の課題としたい。

まとめとして

以上、堺南郷に立地した鑑町芝居について、元禄期の史料、そして享保期の「絵図」を用いて、その規模と内部構造について整理・検討した。

その内部構造は当時の上方の芝居小屋と同等の規模であったものといえる。また「絵図」から内部構造については具体的、視覚的に整理を行った。鑑町芝居は享保期にその内部構造を大きく変化させたことが判明する。その変化は改築といえるが、木戸口の移動、土佐屋重兵衛居宅や役者雑屋の存在、下座の格調とそれにもなう舞台・橋掛の規模縮小、舞台・橋掛の背後へ下座の新設とそれに関連する楽屋の幅の縮小などである。舞台まわりの寸法の変化は、それまで鑑町芝居で上演されていた芝居にも影響を与えたものと考えられる。

鑑町芝居は、近世の芝居小屋としては一般的な景観はしておらず、特異なかたちをとっていた。しかし、その内部構造は当時の上方の芝居小屋と同等といえる。したがって、近世上方の芝居小屋の一端を明らかにし得たものと考ええる。

註

(1) 後藤慶二『日本劇場史』(岩波書店、一九二四)、竹内

芳太郎『日本劇場図史』(壬生書院、一九三五)、図師嘉彦『日本の劇場回顧』(相模書房、一九四七)、須田敦夫

『日本劇場史の研究』(相模書房、一九三七) など。

また農村歌舞伎の研究においても、その研究の端緒をつけたのは、松崎茂氏の農村舞台に対する建築史からのアプローチであった。

さらに、地域の芝居小屋に関しては、竹下喜久男「付一宮境内芝居小屋平面図」(『近世地方芸能興行の研究』清文堂、一九九七)などをあげることができる。

(2) 服部幸雄『大いなる小屋』(平凡社、一九八六。のちに平凡社ライブラリー、一九九四に所収)。

(3) 守屋毅「元禄期の「芝居小屋」」(『歌舞伎—研究と批評』4号、一九八九、のちに『近世芸能文化史の研究』弘文堂、一九九二)。



- (4) 一方、人形浄瑠璃芝居については、大著『人形浄瑠璃舞台史の研究』（八木書店、一九九一年）によって網羅的かつ精微な実証研究がなされている。
- (5) 土田衛「上方の元禄歌舞伎」（『上方歌舞伎集』、岩波書店、一九九八年）。
- (6) 藤田実「元禄期上方歌舞伎の芝居小屋」（『芸能史研究』一二九号、一九九五年）。
- (7) 拙稿「興行地」堺と芝居小屋（『鷹陵史字』二五号、一九九九）。
- (8) 同右。
- (9) 『今昔操年代記』（日本演劇文献研究会編『浄瑠璃研究文献集成』、北光書房、一九四四年）三四～三五頁。
- (10) 『歌舞伎評判記集成』第Ⅱ期第十卷、（『歌舞伎評判記研究会編、岩波書店、一九七六年』）五八五頁。
- (11) 『堺市史史料』写真編。また『堺市史』第三卷、七〇七頁に写真が掲載されている。
- (12) 前掲注（7）。
- (13) 同右。
- (14) 『文化十年堺手鑑』（『堺市史』第五巻資料編二、堺市役所、一九三二）一五〇頁。
- (15) 大寺芝居については前掲注（7）、拙稿参照。
- (16) 『元禄二己巳歳堺大絵図』（前田書店、一九七七年）、『堺御手鑑諸方道法り』（『堺市史史料』一六 堺市立中央図書館蔵）
- (17) 『元禄十七年堺「手鑑」』（『堺市史史料』十 幕政八 堺市立中央図書館蔵）。
- (18) 朝尾直弘「元禄二年堺大絵図を読む」（『都市と近世社

- 会を考える―信長・秀吉から綱吉の時代まで―、朝日新聞社、一九九五年）二一三～二二七頁。
- (19) 前掲注（16）。
- (20) 現在、『堺大絵図』は前田本と堺市本の二本が現存している。前田本は前田書店、堺市本は堺市立中央図書館がそれぞれ所蔵している。二本とも由緒などは判然とはしないが、堺市本は、昭和五年（一九三五）に刊行された『堺市史』第三巻において詳述されている。また前田本については、前田書店がこれを底本として前田本『堺大絵図』を刊行し、それをうけ、朝尾氏によって詳細な検討が加えられている。
- (21) 前掲注（18）、朝尾氏論考同頁。
- (22) 『堺市史史料』風俗（堺市立中央図書館所蔵）
- (23) 前掲注（6）、藤田氏論考。
- (24) 同右および前掲注（7）拙稿。
- (25) 堺市立中央図書館所蔵。
- (26) 前掲注（17）。
- (27) 前掲注（7）、拙稿。
- (28) 同右。
- (29) 前掲注（22）『戎嶋芝居絵図』および同右、拙稿。
- (30) 拙稿「興行地」堺と観客」（『芸能史研究』一五七号、二〇〇二年）。
- (31) 『続堺市史』五九四～五九六ページ。
- (32) 前掲注（7）、拙稿。
- (33) この点については荻田清氏にご助言をいただいた。
- (34) 前掲注（7）、拙稿。
- (35) 前掲注（6）、藤田氏論考。

同右。

(36)

享保十九年(一七三四)正月刊「役者三津物」大坂巻  
(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第1期第

(38)

十卷、岩波書店、一九七六年)五三七頁。  
(39) 前掲注(5)、土田氏論考四九一〜四九三頁。  
前掲注(17)。